

マザー・テレサの言葉に常々深い感銘を受けていた方が、彼女に会いたいという思いを募らせ、インドのカルカッタ（現・コルカタ）へ渡った。彼女に直接、どうしても聞いてみたいことがあったからである。

当時のカルカッタは人口1千万人のうち2百万人が路上生活者で、至るところに生死もわからない行き倒れの人が転がっていた。全身から膿を出している人、ウジ虫の湧いている人、とても側に寄せたものではなかった。

しかし、マザー・テレサと仲間のシスターたちは、一番死に近い人から順番に抱きかかえて、死を待つ人の家に連れていき、体を綺麗に洗ってあげ、温かいスープを与えて見送るようにしていた。せめて、最期の瞬間くらいは人間らしくと願ってのことだった。

運よく、カルカッタの礼拝堂でマザーに面会することのできたその方は、「どうしてあなた方は、あの汚い、怖い浮浪者を抱きかかえられるのですか」と尋ねた。マザーは即座に、「あの人たちは浮浪者ではありません」とおっしゃるので、その方は驚いて「えっ、あの人たちが浮浪者でなくていったい何ですか」と聞くと、「イエス・キリストです」とマザーは答えた。その方の人生を変えるひと言だった。

マザーは、さらにこうおっしゃった。

「イエス・キリストは、この仕事をしているあなたが本物かどうか、そしてこの仕事をしているあなたが本気かどうかを確かめるために、あなたが一番受け入れがたい姿であなたの前に現れるのです」

その方は、目から鱗が落ちる思いだった。マザーの言葉を伺った瞬間、その方は、以前あんな人は辞めてほしいと思っていた人が、実はイエス・キリストであったことに思い至ったのである。

自分はこれまで、他人を変えようとするあまりどれほど人を責めてきたことだろうか。しかし、いくらそれを続けたところで人を変えることはできない。人生でただ一つ、自分の責任において変えられるのは自分しかない。常に問われているのは、自分から変わる勇気を持てるかどうかだ。このことに気づいた途端、その方は心が晴れ晴れとしてきたそうである。

教員として生きてくると、今まで自分の目の前に、何人かのイエス・キリストが現れていたことを思い知らされる。それは生徒だったり、保護者だったり、ときには同僚だったりした。教員としての自分が本物かどうか、どれほど本気なのかを試されていたと思うと、妙に納得してしまう。

きっと、どの学校に勤務しても、目の前にイエス・キリストは現れる。その度に、自分が本物かどうか、その本気度が試されることになる。随分と長い間、自分にとって受け入れがたい目の前の人イエス・キリストだとは気づかなかった。もう過去には戻れない。前を見て進むしかない。これから出会うイエス・キリストに対しては、今までとは違う接し方ができるような気がする。